



バンコクの年越しイベントは、昨年10月にシリキット王太后が崩御されたことで、派手な演出は自粛すると思われたが、大みそかの夜に市内中心部にあるベンチャシリ公園に出かければ、数千人のカウントダウンのイベント参加者が年越しの瞬間を待ちわびていた。午前0時前に公園より数百基のドローンが上がり、参加者は舞い上がったドローンにカメラを向けた。そして、商業ビルの壁にカウントダウンのプロジェクトジョンマッピングが始まり、年が明けた瞬間に公園近くの45階建てのオフィスビルの屋上から花火が打ち上げられ、レーザー光線、ドローン、マッピングを使った見事な3分間の演出に感動を覚えた。またその

打ち上げ花火、平和実感

タイ・バンコクの年越し



年明けの瞬間＝バンコク

瞬間を過ごすことで、平和であることの大切さを改めて感じた。昨年11月にバンコクから東北に500キロ離れたスリン県を訪ねた。タイの3大祭りと言われる「象祭り」を見るのが目的であった。スリン県のカンボジア国境にあるクメール遺跡「タクワイー寺院」(プ

レア・ウィヒア寺院の一部ともされる)の実効支配を巡る対立により、国境では緊張が続いていたが、祭りが開催されるスリン県の中心部は、国境から90キロ離れており、特に危険を感じなかった。初めて見た「象のパレード」は、200頭の象が街を練り歩き、小さな子供たちは早朝から、沿道に座

って大きな象に手を振っていた。パレードを見ていた人は皆笑顔で、大きな象の小さな目がとても愛くるしく思えた。象はかつての戦士から、平和と共存の象徴へと役割を変え、タイ国民と共に歩ん

できたことを祭りが証明していた。そんなスリン県でも12月に入り、国境紛争が激化したことで、多くの住民が避難生活に追いやられた。

年末直前にタイはマレーシアの仲介をはじめ、米国、中国の後押しもあって、カンボジアとの停戦協定を再度結び、大みそかに18人のカンボジア人の捕虜を解放した。今後も協定に基づき一歩ずつ、平和的な解決に向けて進んでいくだろうが、停戦停止の懸念も払しょくできない。

タイでは2月に下院選挙を控え、新しい政権が誕生するが、都市中心部に絞った経済施策を優先する前に、カンボジアとの平和的な解決や、陸路での往来再開、経済連携の共生を期待したい。平和こそが国民の生活を豊かにし、経済発展の礎ではないだろうか。(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所長 高橋英孝)